

大胡小学校の取組

1 研究のテーマ

互いを認め合い、伸び伸びと生きる子供の育成 ～よさを認め合える交流活動の工夫～

2 研究のねらい

全教育活動において、よさを認め合える交流活動を工夫することにより、互いを認め合い、伸び伸びと生きる子供の育成が図れることを、研究と実践を通して明らかにする。

3 研究の内容

(1) 主題設定の理由

近年、国際化、情報化、少子高齢化など社会は急激に変化し、核家族化の進行や地域における地縁的なつながりの希薄化など子供を取り巻く環境は大きく変化している。また、自然体験や生活体験の不足、命の重みに対する感受性の乏しさや人間関係の貧しさ、規範意識の低下などを背景にして、いじめや不登校をはじめとする様々な人権に関わる問題も生じている。このような中において、児童に、自分の大切さや他の人の大切さに気付かせるとともに他の人への思いやりや生命を尊重する心などを育てていくことは大変重要な課題である。

本校は、児童数419名の中規模校である。児童は、明るく素直な子が多く、男女の仲もよい。休み時間には、校庭で一緒に元気よく遊ぶ姿も見られる。しかし、一方で、自己中心的な考え方やコミュニケーション不足から、友達を傷つけてしまったりケンカになってしまったりすることもある。学習面では、課題に前向きに取り組み、努力することができるが、友達の考えをよく聞いて理解したり自分の考えを相手に分かりやすく伝えたりしながら学習を深めていくということには課題が見られる。また、自分自身でよく考えてから行動したり、人前で発表したりすることに苦手意識をもっている児童も少なくない。このような児童に、互いのよさを認め合える交流活動を工夫し実践していくことは、児童が、自尊感情を高めたり他者理解を深めたりするとともに、自信をもって主体的に行動しようとする態度を育てていくことにつながるものと考えられる。

本校の教育目標は、「心ときめく 笑顔はじける 命かがやく 児童の育成」である。「心ときめく」とは、学校に居場所があり、一人一人が自己実現のチャンスを与えられるということ。教育活動の一つ一つに目的があり、「わくわく」「どきどき」する瞬間があるということ。「笑顔はじける」とは、学習に意欲的に取り組み、授業の中で、分かる喜びを実感できるということ。話し合い活動の中で、友達のよさに気付き賞賛し合うことで、高い充足感を味わえるということ。「命かがやく」とは、今しなければならぬことに、力一杯取り組むことができるということ。全てを出し切ることを美德とし、体の芯から湧き上がる力を感じられる瞬間があるということである。これらの具現化のためには、各教科・領域の基礎・基本を確実に身に付けさせるとともに、教育活動全てにおいて、「よさを認め合える交流活動」を工夫して取り入れていくことが大切であると考えられる。

本校では、平成27年度に文部科学省の「人権教育総合推進地域『大胡地区』事業」を

受けて、人権教育の全体計画・年間指導計画の見直しを行った。平成28年度からは、「人権教育総合推進地域『大胡地区』事業」とともに、前橋市の「教科別研究指定（音楽）」を受けたことから、音楽科の目標と人権教育との関わりについて整理し、研究の方向について話し合いを重ねてきた。そして、研究主題「互いを認め合い、伸び伸びと生きる子供の育成～学校・家庭・地域社会の連携を通して～」に、本校独自の副主題「よさを認め合える交流活動の工夫」を加えて、音楽科と音楽活動を核とした「かかわり合い」「みとめ合い」「たかめ合い」を推進し、豊かな人間性育成のための取組を行ってきた。今年度は、更に日常の様々な場面において、児童が互いを認め合い、伸び伸びと活動できるよう、家庭との連携も深めながら人権教育を推進していくこととした。

（２）研究の見直し

- エンカウンターや「ぼかぼか隊」活動などを通して、児童相互の交流を図る場の工夫をすれば、児童の自尊感情を高めたり自他共に大切にしたりする児童を育成することができるであろう。
- 各教科の授業において、一人一人を大切にしたい分かる授業を目指し、交流活動の充実に着目した授業実践を進めれば、学習意欲が高まり、主体的、協働的な学びの楽しさを知る児童を育成し、学力の向上を図ることができるであろう。
- 学校全体で共通理解し、言語環境を整えたり学習規律を徹底させたりしていけば、学校・学級が安心して過ごせる場となり、自信をもって行動できる児童を育成することができるであろう。

4 具体的な取組

（１）人間関係づくり部の取組

人間関係づくり部では、望ましい人間関係を構築するために、教職員と児童の人権意識を高める取組について、研修・実践を行った。

児童に対する取組としては、これまで本校で行ってきた様々な活動を、人権の視点で見直すことから始めた。児童会のあいさつ運動、図書委員会の低学年への読み聞かせ、「なかよしタイム」に行う異学年交流などの活動は、児童主体として、児童の自主性に重点を置き、できることを話し合いながら継続して進めていくこととした。

また、昨年度より、児童の自己肯定感を高めることを目指し、「ぼかぼか隊」と名付けた認め合いの活動を、全校で行っている。

職員に向けては、群馬県の人権教育についての基礎研修を行うとともに、構成的グループエンカウンターについての実践研修などを行った。エンカウンターについての研修は、本校独自の交流のルールを加えて、「けやッキータイム」とし、短時間に楽しく行える交流活動として、継続した取組になった。

また、家庭・地域との連携を図るために、学校公開日を活用して、人権集会や各学年での人権の授業公開なども積極的に行うことができた。

①「けやッキータイム」（交流活動）

児童の人間関係を高める交流活動を行うために、「けやッキータイム」を設け、構成的

今年度は、この活動を「おうちでぼかぼか隊」として各家庭へ広げ、親子でよいところを見つけて葉っぱに書いて伝え合う活動に協力していただいている。1学期には約77%の家庭に協力していただくことができ、「子供のよいところにたくさん気付くことができました。」「何気ないことでも言葉に出して伝えることにより、温かい気持ちになることができ、楽しく取り組めた。」などの感想もいただくことができた。

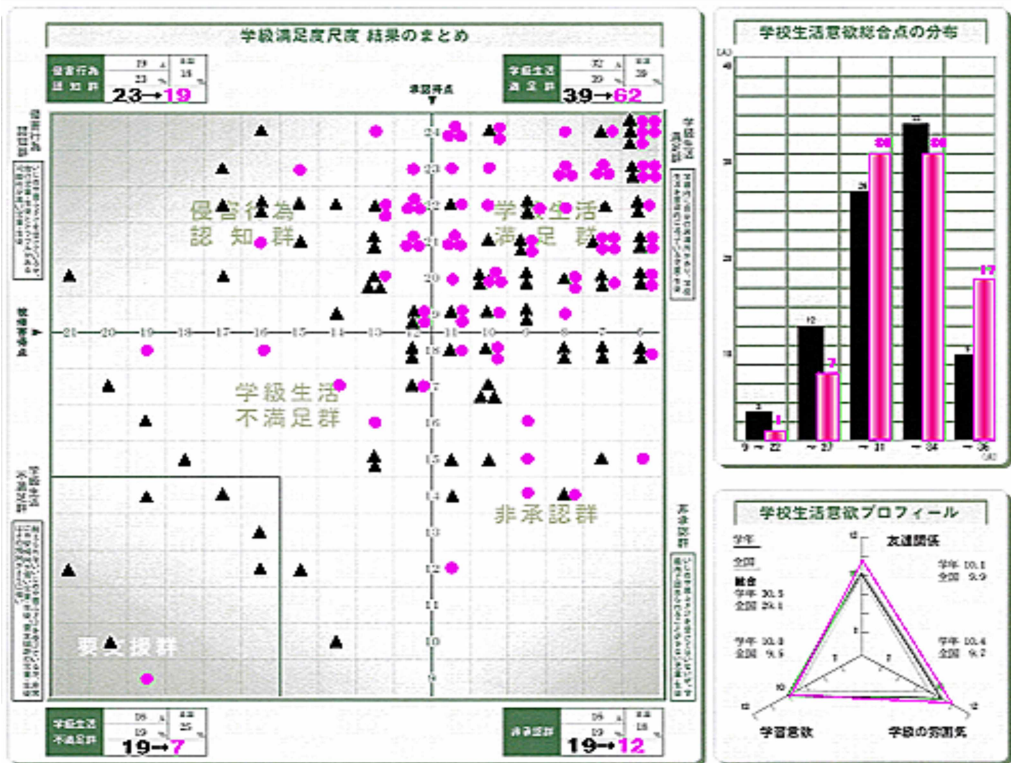


〈公開日の様子〉

③hyper-Q U、C & S 調査による児童理解

平成27年度より、毎年1学期に、偶数学年でhyper-Q U、奇数学年でC & S 調査を行い、児童理解に努めてきた。結果を各学年ごとに分析し、特に、配慮が必要な「学級生活不満足群」に位置する児童などについては、全職員でその後の様子について情報交換し共通理解を図ってきた。

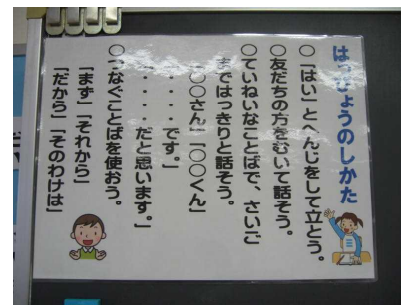
右は、今年度の6学年児童のデータを、4学年時のものと比較したものであるが、「学級生活満足群」に位置する児童が増え、学校生活に対する意欲も高い児童が増えていることが分かる。



(2) 授業研究部の取組

①学び方のルール

よさを認め合える人間関係や環境をつくるために、学び方のルールを作成し、全学級に掲示した。どの学年、どの授業でも共通して意識することを整理し、更に発達段階に応じた内容にしたことで、学習規律が徹底するようになった。



②交流の工夫

全学年、全教科で意図的に交流する場面を設定するようにした。はじめは、個人で考え、次にペアやグループで考えを伝え合い、それを学級全体で広げ合ったり、練り上げたりした。交流では、ノートを見せながら説明したり、付箋で感想を伝え合ったりなど様々な工夫をした。また、「お願いします。」「ありがとうございました。」などの「けやッキートークのルール」を授業中にも意識させたため、温かい雰囲気の中で考えを伝え合うことができるようになった。



③音楽での交流活動

音楽科として、自分の思いや願いを表現したり、友達と交流を通して協働的に活動したりするなど、人権教育との関連を配慮して「音楽づくり」に重点を置き、研修に取り組んだ。また、全学年で授業の流れを統一し、「心ほぐし」の常時活動を授業の導入に取り入れた。「心ほぐし」では、「アルプス一万尺」や「おちゃらか」などのわらべ歌をペアやグループで行い、お互いのよさや楽しさを見付けられるようにした。また、本時のねらいを達成するための活動においても意図的に交流活動を取り入れ、一人一人の表現のよさを認め合ったり、友達と音楽をつくり出すよさを感じたりできるように工夫した。



④音楽集会・歌声タイム

「音楽集会」では、なかよし委員会が企画運営し、「POWER OF MUSIC」をスローガンに活動を行った。今月の歌を歌ったり、聴き合ったりして、お互いのよさを肌で感じ合えるような機会を設定した。また、音楽集会の様子を、写真や児童の感想を入れて、玄関前に掲示した。

「歌声タイム」では、週替わりでクラス→学年→異学年の順に交流しながら、今月の歌を歌ったり「心ほぐし」の活動を行ったりした。また、なかよし委員がほぐしリーダーとなり、各クラスでリーダーシップを発揮するよう工夫した。



⑤その他の取組

音楽環境を整えるため、お昼の放送を工夫したり、音楽



に関する掲示物の提案をしたりした。お昼の放送では、曜日ごとにジャンルを変え、様々な音楽に触れる機会を増やしていくようにした。音楽に関する掲示物では、階段にドレミの階段（階名）を掲示したり、マーチング楽器を紹介する掲示をしたりして、普段から音楽に親しめる環境づくりを工夫した。

5 成果と課題

（１）研究の成果

- 構成的グループエンカウンターについて全職員で研修を行い、「けやッキートークのルール」として、本校の交流活動の基本的な捉え方を共通理解することができた。児童も「けやッキートークのルール」を意識しながら、友達との関わりを楽しむことができるようになってきた。
- 「ぼかぼか隊」活動を継続して行ったことで、温かい気持ちで友達に接したり、友達のよい面に目を向けたりすることが意識してできるようになった。また、「おうちでぼかぼか隊」活動として、実践を家庭にも広げたことで、人権教育に対する家庭の意識を高めることにつながった。
- 音楽の授業の導入時に行っている「心ほぐし」の活動を、「音楽集会」や「歌声タイム」でも実施したことで、自他を大切に作る温かな人間関係や学校・学級の雰囲気づくりができ、児童が安心して表現活動に取り組める素地をつくることができた。
- 集会活動を児童主体の活動として、委員会を中心に計画・実行することで、児童が全校の前で活躍できる機会が増え、自信をもって主体的に自分の役割を果たそうとするようになった。
- 各教科において、交流活動の充実に着目して授業実践を重ねたことで、児童同士で教え合ったり、認め合ったりする態度を養うことができ、共に学び合おうとする意欲が高まってきた。
- 言語環境を整え、学び方のルールを共通理解して指導にあたったことで、友達の発表を最後までしっかり聞こうとする雰囲気がつくられ、安心して自分の考えを発表できるようになってきた。
- 3年間の取組を通して、教職員の人権意識が高まった。

（２）今後の課題

- 人権について分かっているにもかかわらず感情的になったときに相手を傷つける言動が出てしまうことがある。日常生活に効果的につながるような人間関係づくりを、今後も継続して行っていく必要がある。
- 「けやッキータイトム」を通して培ってきた交流のルールを、音楽科を中心に授業中の交流活動に生かす実践を重ねてきた。さらに、本研究の成果を他教科にも広げ、主体的、協働的な学びの楽しさを味わわせていけるよう、取組を継続していきたい。
- 計画的、継続的な取組が行えるよう、年間指導計画の改善を行い、人権教育を明確に位置付けていく必要がある。

【参考文献】

曾山和彦著『教室でできる関係づくり「王道」ステップ ワン・ツー・スリーⅡ』文溪堂